

次の文章を読み、あなた自身の「自分の型」について、600字以内で述べなさい。

美校に入って、まず驚いたことは、先生方から「自由に描きなさい」と言われたことである。しかも「日本画の型をとにかく崩しなさい」とも言われた。

古典の模写を一生懸命にやりなさい、と教える一方で、自由に描きなさい、と言われる。安田先生、小林先生は学生一人ひとりの個性を尊重しよう、とされたのだが、崩すべき型どころか、筆の遣い方ひとつとっても、美校入学以前に習ったこともなかった私には、「自由に描きなさい」ということの意味を深く理解することなどとうてい不可能であった。

自由にやれと言われても、自由にやればやるだけ、失敗が積み重なっていった。初歩的なことだが、水で溶いた絵の具で和紙に直接描けば、絵の具は滲む。この滲みを防ぐには「どうさ」という、ニカワとミョウバンを溶いた水をあらかじめ紙の上に引いておけばいいのだが、これも失敗を重ねながら技術を体で覚えていく以外にない。

「自由に描きなさい」

ということの第一義は、「より早く多くの失敗を積み重ねなさい」ということだったのである。失敗すると、どうして先人たちはうまく描いているのか、とあるピンポイントに焦点を絞って学ぼうとする姿勢が身につく。そのことを繰り返すうちに、徐々に自分の型の一部ができていく。

(平山郁夫『生かされて、生きる』より)

【注】

美校＝東京美術学校。東京芸術大学美術学部の前身。